

## 第5次東日本大震災仮設自治会支援報告 仮設自治会は被災者主体の復興の原動力

神戸人権交流協議会では、「阪神・淡路大震災支援への恩返し」を合言葉に、5年間にわたり東日本大震災被災者支援を行い、その中で神戸の仮設生活における経験や教訓を「伝言」として被災地に伝えてきました。

第5次支援となる今回は、8月30(日)31(月)9月1日(火)の3日間にわたり仙台市内の仮設自治会3ヶ所、石巻市の仮設自治連合会を訪問し、激励と交流を行うとともに、仙台市災害復興推進室を訪問し、復興事業の到達点および展望と仮設自治会に対する評価をお聞きしました。

8月30日、まず仙台市内にある岡田西町仮設自治会と南蒲生地区を訪問、大工不足による自力再建の悩みや南蒲生地区が仙台市の復興事業のモデルになっている事などをお聞きしました。

8月31日は仙台市内の東通仮設住宅へ訪問、ここは危険区域に指定された「荒浜地区」の人がほとんどで集団移転先での自力再建へ向けての苦労をお聞きしました。

また、「神戸市から支援に来ていた職員や、ボランティアの方々は被災者に今何が必要かすぐに判断し、行動してくれた」と、感謝しておられ、阪神淡路大震災の経験は現場で活かされていたようです。

つづいて石巻仮設自治連合を訪問、石巻市の仮設住宅の状況は約7割が依然として仮設に居住しているようで、仮設劣悪化や、近隣トラブルも増加しつつあり、石巻仮設自治連合会が政府と住民の中間団体としての役割を果しているようです。

また、増田会長の案内で復興公営住宅を視察した際には、様々な欠陥がある事に驚きました。

増田会長は、「石巻市は住宅建設会社に被災者の意見を聞かず、設計・施工を丸投げしている」と批判されていました。

9月1日はあすと長町仮設住宅を訪問、ここは宮城県内全域から抽選で入居した人たちが多く、コミュニティを作るうえでたいへんご苦労されたそうです。初代会長の鈴木さんは、「自治会運営のための口座を作ったのは神戸人権交流協議会からの支援がきっかけだった、神戸からは本当に息の長い支援をいただいた」と話しておられました。

最後に仙台市復興事業局生活再建推進部・生活再建推進室(推進室)を訪問、推進室の佐藤俊宏室長は「今でも神戸市から送っていただいた資料を毎日見ている、本当に神戸からの暖かい支援に感謝している」と話しておられ、また仮設自治会については「仮設自治会は必要だった、住民からの様々な要求を仮設自治会が拾い上げてくれたことは行政としても大事なことだった」と話しておられました。

阪神・淡路大震災で神戸市民が過酷な生活を行政とともに切り開いた経験は確実に生きていました。



岡山県人権連では、人権連の有志を中心として10月31日から4日間、村上雅彦副議長と、青年班から田中金一事務局次長、中島正智常任幹事、田中英伸幹事と岡本鉄也幹事（瀬戸支部）の5人が、今回4回目となる復興支援活動として、精米500kg余りとキャベツ、大根、小松菜、ほうれん草などの野菜、義援金2万2千円余りを岩手県宮古市の「みやこボランティアセンター」に届けました。

10月30日の13時、精米約450kgを積み込んだレンタカーが、県連の中島純男議長などに見送られ民主会館（岡山）を出発、津山に寄りキャベツなどの野菜、約20箱と精米を積み込み、15時いよいよ津山インターへと向かいました。東北自動車道の盛岡南インターを11月1日の9時に通過し、岡山から22時間かけて11時に目的地であるJcpみやこボランティアセンターに到着しました。

センターの関係者とあいさつを交わした後、千徳（せんとく）ボランティアセンターでは、米6kgを一世帯分として野菜とあわせて80世帯分に分け、午後から避難者の皆さんが居住する「崎山災害住宅」で無料の復興支援市を開き、被災者の人たちに配布しました。

支援物資を受け取った40代の女性は、「震災前は米を作っていた、大家族なのでお米や野菜の支援はありがたい。こうなってみて、皆さんの有難味がよくわかります。ありがとうございます」と目にうっすらと涙を浮かべながら話していました。

宮古市内を視察していくと、市内のあちこちに4年前の「津波到達点」を示す看板や印が津波のすさまじさを示しているようでした。

15時過ぎに津波災害の激しかった「田老地区」を訪ね、自身が震災で犠牲者を出しながらも震災後「学ぶ防災」組織のボランティアとして、災害の実態と防災の必要性について語り継ぐ元田久美子さんに被災地を案内してもらいました。

元田さんは、「田老地区では、高さ10mの防潮堤が3本あったにもかかわらず、マグニチュード9の地震で、16mの津波が起き、1700戸が被災し、船の流出が850隻、181人の犠牲者を出す災害となった」とし、「16mの津波は、防潮堤を駆け上がりすべてのものを飲み込んだ」と当時の様子を語り、「災害はいつやってくるかわかりません。万が一のために防災の準備ができているかどうかが生死の境目です」と、防災の必要性を訴えていました。

2日の8時半には、被災者の方が住む愛宕（あたご）仮設住宅を一軒づつ訪問し、「岡山からお米と野菜をもって来ました」と声をかけ、生活上の要望などを聞くアンケート調査を行いました。

耐用年数2年半の仮設住宅に4年半も暮らしていることもあり、岡山から22時間かけてきたことを伝えると、「遠い所からありがとうございます。ここは高台で買い物にも不便です、特に冬、雪が多いと大変です。お米と野菜は助かります」「住宅の換気が悪く、湿気が多い、冬の寒さは堪えますが、市営住宅が当たったので年明けには引越しです。ありがとうございます」と、感謝の言葉が返っていました。

訪問活動が終わり愛宕住宅の集会所で、以前鯉ヶ崎で銭湯を経営していた巖

岩（ほろいわ）政子さんから、「皆が集まる憩いの場所を」と、津波で全壊した銭湯の再建に向けた取り組みを聞きました。

政子さんは、「漁船の乗組員も銭湯は楽しみ、観光客も立ち寄り、地域の社交場の役割もあり、是非実現したい。国や県からグループ補助金として4分の3は出るが、残りの1200万円が必要、支援も全国に広がり、来年の夏には完成させたい」と語っていました。

今度の活動を通じ、「現地は毎年変化している。支援を続けながら、来年がどうなっているかこの目で確かめたい」と参加者の一人が感想を語っていました。

